報告に対する応答 -ハイテク社会における人間の価値と「共通感覚」

佐藤空 (東洋大学)

「彼 [ユヴァル・ノア・ハラリ] は、ビック・データのシステムがわれわれよりもわれわれ自身のことを知るようになり、われわれは自分に関する重要な意思決定を行う権限をアルゴリズムに委ねることになるだろうと予測する。さらに、このような変化に対応して、われわれは最先端の技術を駆使して、自らに遺伝子操作を行って、自分自身を作り替えていくかもしれない。近年の科学技術の発展を見るならば、これが決して荒唐無稽なシナリオとは言えないことは明らかだろう」」

「人の行動・位置・視線等を即座に監視・観察(real time monitoring)することは、現在の技術ですでに可能ですし、体温・脈拍・血圧なども着用可能な簡便な感知装置で監視可能です。・・・しかし、法哲学などの領域においても、いまや統治功利主義が大まじめに論じられています・・・・そこでは、人格・自由・自律といった近代が達成した価値を軽々と超越して、統治者の「功利主義リベラリズム」なる思想が擁護されているのです」²

冒頭、二名の報告者の近著から引用したが、その内容は発言者の関心とも重なる。今後の ハイテク社会と経済学史も含めた人文社会科学の役割について報告者に伺いたいが、まず は発言者が最近、抱いている「問題意識」を投げかけてみたい。

ハイテク社会では人間の価値が問い直され、また危機に瀕する可能性があるが、人文社会 科学はデジタル化の方向性に沿った展開を模索する必要があるとともに、本来の専門を生 かして人間の価値に関する問題に規範(または理性)と情操の両面から取り組むべきではな いか、というのがここでの趣旨となる。

ここでいう「ハイテク」とは、ビックデータ、人工知能、ゲノム編集など最近の技術革新 全般を指す。ビックデータに関していえば、経済学は最近のトレンドの恩恵を被っているよ うに思われる。ひと昔前より実証分析に研究の比重が置かれるようになったが、なによりも

¹ 瀧澤弘和『現代経済学-ゲーム理論・行動経済学・制度論』中央公論新社、2018 年、pp. 261-2.

² 小野塚知二『経済史-いまを知り、未来を生きるために』有斐閣、2018年、p. 530.

ビックデータや人工知能がビジネスや社会分析に役立つと一般社会が「確信」を持つようになったおかげで、統計的・数理的手法の価値自体が以前よりはるかに認識されている。声高なだけで正確な理解を欠いている場合も見受けられるが、それでも関連分野にとっては追い風である。「経済学は役に立たない」という近年まで広くあった一般の声は、「ビックデータ」や「アルゴリズム」といった言葉で部分的にかき消されているかもしれない。統計学の基本は変わらないのに、ほんの十年ほどの間に「世論(opinions)」は確かに変化した。

もっとも、これは経済学史や経済思想史に当てはまることではなく、むしろ、統計・数理を前面に押し出さないこれらの分野にとっては逆風でさえある。経済学史は経済学の主流でなくなってから久しいが、近年のトレンドはさらにその傾向を強める可能性がある。ただし、経済学史のみが孤軍奮闘しなければならないという状況ではなく、人文学もしくはそれと同様の方法論を用いる社会科学分野にも同じことが言えそうである。これらの分野を「デジタル化」することは分野としての生き残りのために必要だろうが、単に学問分野の存続のために流れに乗るのではなく、従来型と新たな手法を組み合わせて倫理的な諸問題の解決のために貢献すべきではないか、というのがここでの主張である。

人文学あるいはそれに近い社会科学分野は、従来から文献資料(史料)にあたりながら事実とその含意、そして規範を探究してきた。政治理論・政治哲学の分野ではロールズ以来、「正義論」が大きなテーマとして、論じられてきた。人工知能やゲノム編集技術が社会を大きく変えようとしている今日、人文学的観点から倫理を論じる必要性はこれまで以上に高まっており、今後、さらに高まるだろう。だが、そういった社会の要請に人文社会科学は有効なアイデアを提供できるだろうか。今後、倫理をめぐる社会の状況が深刻化するならば、これまで以上のアウトリーチが必要である。

また、必ずしも新しい方向性を模索しなくとも重要な研究は多くある。例えば、政治思想 史家リチャード・タックの Natural Rights Theories (未邦訳) ³ は公刊から四十年以上経

³ Richard Tuck, Natural Rights Theories: Their Origin and Development (Cambridge,

つが、ヨーロッパにおける自然権概念の歴史的形成を考える上で依然として必読書である。 日本で類似の研究は少ないが、こういった研究の積み重ねなしに権利概念が社会において 高い水準で理解されるかは疑問である。

哲学・思想が倫理・規範に関わる理論を洗練させるとともに、歴史学が史実を丹念に掘り 起こし、丁寧に議論することの意味は、今後ますます増大する。だが、ICT、人工知能、ビ ックデータを扱える者に高い評価を与えていこうとするのが今後の社会のあり方ならば、 哲学や歴史など見向きもされない可能性がある。「デジタル社会はこれまでの社会とは全く 違う、人間さえゲノム編集で変えてよい、従来の人権概念は時代遅れ | などという声が今後 もし高まるなら、人文社会科学は懐疑的に応答すべきである。重要なのは、人間の価値を理 性的に理解する-「あたまで分かる」― だけではなくて、感情として理解できること-「心 で分かる」―こと、そして、ヴィーコ、アレント、ガダマー、その他多数の思想家らが注目 してきたような「共通感覚(コモンセンス)」を構築しようとする試みではないか。4

例えば、「リベラル優生学」をめぐる言説を一瞥して分かる通り、知識人の間でも意見が 分かれ、簡単には収拾がつきそうな状況にない。5 アメリカの人種問題に目を向けると、最 近、刊行された『白人ナショナリズム』の著者は、「白人ナショナリスト」を採る人物のな かには高学歴かつ人間性としても問題のない者が少なくない点を指摘している。6 ジャン・

Cambridge U.P., 1979).

^{4 「}共通感覚」の定義・内容は様々だが、アレントの以下の解説に従うことにしたい(ただ し、カント解釈についてはここでは問わない)。「カントにとって共通感覚とは、すべての人 間に共通した感覚を意味するものではありませんでした。厳密には共通感覚とは、わたした ちが他人とともに共同体のうちで生活できるようにする感覚であり、共同体の一員として わたしたちが自分の五感を使って他者と意志の伝達が行えるようにするものでした。」ハン ナ・アレント、ジェローム・コーン編、中山元訳『責任と判断』筑摩書房、2016 年、p. 227. 5 マイケル・I・サンデル、林芳紀・伊吹友秀訳『完全な人間を目指さなくてもよい理由-遺伝子操作エンハンスメントの倫理』2010年、ナカニシア出版、第四章.

⁶ 渡辺靖『白人ナショナリズム−アメリカを揺るがす「文化的反動」』中央公論新社、 2020年、pp. 8, 54, 124, 196 など.

ティロール『良き社会のための経済学』は第1章の冒頭付近で、「認知バイアス」について 言及している。それによると、「温暖化が人為的な要因によるという科学的な証拠を提示さ れたアメリカ人の反応を観察した」近年の研究によれば、「教育水準や知性」に関わらず、 共和党支持者は「信頼性の高いデータを信じようとしなかった」という。⁷

発言者は、留学中、大学のアジア研究科で日本語のチューターをしていたが、日本に留学・長期滞在したあとの自分の学生たちの変貌ぶりにしばしば驚かされた。例えば、日本の食生活について文献を通して学ぶのと、それを現地で自ら体験してくるのでは、知識の質が大きく異なる。われわれが「言葉にできるより多くのことを知ることができる」8のは明らかだが、そのことで「他者」に対する価値観は大きく変化する。理性は感情を抑えることはできても、感情そのものを根本的に変えるものではないかもしれない。感情を大きく変えるのは人的交流を含む体験であり、それが理性と組み合わさって、初めて「他者」をく自分なりに>理解できるのではないか。

人権は「普遍的な」価値観の一つとされることが多い。だが、人工知能でも、ゲノム編集でも、その価値観を共有しない国や集団の勢力拡大によっても、その規範は容易に危機に瀕しうる。人権という規範を一応は共有している人間であっても、人権をしばしば危機に晒してしまう。他者に価値を置けるかどうか、他者を尊重できるどうかは、理性だけでなく、情動にも大きく依存しているからである。

リチャード・ローティはある論考の中で未来の「道徳的進歩」のための助言者としてヒュームや哲学者(ヒューム研究者)のアネット・ベイヤーを挙げている。そして、「法を見分ける理性よりは、矯正された … 共感の方が道徳的能力にとって大切だ」というベイヤーの一節を引用する。9 もちろん、理性か感情かという二者択一の問題ではなく、その両方をい

⁷ ジャン・ティロール、村井章子訳『良き社会のための経済学』日本経済新聞出版、2018 年、p. 34.

⁸ マイケル・ポランニー、高橋勇夫訳『暗黙知の次元』筑摩書房、2003 年, p. 24.

⁹ リチャード・ローティ「人権、理性、感情」、ジョン・ロールズ他、スティーヴン・シュ

かに社会に組み込むかということが課題であろう。

アリストテレスらの共同体論を解説したアレントの言葉を引用してみたい。

コミュニティの絆とおぼしきものは、正義ではなく…… 友情である。友情における政治的要素とは、誠実な対話において、友人同士が互いの意見に内在する真実を理解し合うことができるということだ。友人は、一人の人間としての友人以上の存在であり、互いにとって公共世界がいかなるものであり、いかなる具合に独特の了解がなされているのかを理解し合う。しかもこの友人たちは、いつまでも不均等な、すなわち違う存在なのである。この種の理解—世界を …… 他者の視点から見ること—は、一段と優れた、政治的な部類の洞察である。 …… ソクラテスは、哲学者の政治的機能はこの種の公共世界を確立するのに手を貸すことだと、信じていたふしがある。その公共世界は友情による理解の上に構築され、そこではいかなる統治者も不要なのである。 10

ところが、アレントがそのあとで語るように、「哲学者」こそ真理を求めるかたわら「共通感覚」を理解できない唯一の人物となりうる。¹¹ 21 世紀のハイテク社会における「哲学者」とは誰だろうか。もしそれがイノベーションを構築する者だとすれば、グローバルな領域に数多く存在することになる。だから、問題はアリストテレスやソクラテスが想定する共同体よりもはるかに広大なところにあるが、そこでは統治者がむしろ「不在」である。アレントは別の論考の中で以下のように述べている。

わたしがある共同体の一員であるのは、この共通感覚をそなえることによってであり、そのためにこうした妥当性を共同体の全体に期待することができるのです。自分が世界の市民だと考えていたカントは、これがすべての人類の共同体において妥当することを期待していました。カントはこれを「拡張された心性」と名づけています。こうした合意な

ート、スーザン・ハーリー編、中島吉弘・松田まゆみ訳『人権について-オックスフォード・アムネスティ・レクチャーズ』みすず書房、1998年、p. 158.

¹⁰ ハンナ・アレント、ジェローム・コーン編、高橋勇夫訳『政治の約束』筑摩書房、2018 年、pp. 71-2.

¹¹ アレント『政治の約束』、p. 90.

しでは、人間は文明的な交わりを結ぶことができないとカントは考えたのです。¹²

21 世紀の社会では、ある種のハイテク化によって、著しい格差によって、国際政治のバランス・オブ・パワーの変貌によって、「共通感覚」の構築が妨げられ、グローバルな領域における「文明的な交わり」が難しくなる。

貧困や格差の是正のために尽力するのも経済学者の役割であることは言うまでもない。 近代史がおそらくは示唆するように、経済的に豊かであること、精神や生活に余裕があることは「共通感覚」構築への第一歩である。だが、同時にそれだけでは「共通感覚」の確立に 不十分であることも歴史が教えることであり、また人間そのものが改変される可能性がある未来社会では、それで事足りないことはいっそう明らかである。

とすれば、人文社会科学者ができることは何だろうか。この夏、話題になった書籍の一つに『AI とカラー化した写真でよみがえる戦前・戦争』がある。¹³ 戦前・戦中・戦後すぐの写真が人工知能の助けを借りてカラー化されただけで、想像力は大いに刺激され、過去の社会が接近してくるような感覚を得る。今後、歴史は VR(仮想現実)や AR(拡張現実)などによって、より「体験型」に接近していくだろう。教育や社会での歴史の受容が大きく変化する可能性がある。新しい技術を適切に活用すること、誤りや偏りを的確に批判することは、人文学・社会科学の役目である。

また、「自動音声認識」や「自動翻訳」は外国語資料からの情報取得を促進し、通訳の役割を果たすなど、活発な利用が見込まれる。だが、例えば、大学や地域社会で留学生や移民との交流を妨げている要因の一つが言語であることを考えれば、これらの技術はその解消に有用だろう。ただし、「自動翻訳」があるから外国語の学習がいずれ不要になるという意見には警鐘を鳴らす必要がある。なぜなら、外国語学習こそ「共通感覚」の醸成に有効だか

¹² アレント『責任と判断』、p. 228.

¹³ 庭田杏珠、渡邊英徳『AI とカラー化した写真でよみがえる戦前・戦争』光文社、2020 年.

らである。

完全な「共通感覚」をつくることは無論、不可能であり、また、「共通感覚」と関係なく様々な危機が生じ得ることは言うまでもない。だが、地球温暖化、人工知能、ビックデータ、ゲノム編集等々、グローバルな規範と「ルール」なしには解決不可能な問題が山積する現代における人文系分野の役割とは、人間の価値を問い直すことであり、その価値を守る規範を探究しつつ、「共通感覚」の構築を着実に目指すことではないだろうか。小野塚会員の『経済史』の末尾には、「そうなってほしくない次代を、ディストピアや反理想として明瞭に描き、それを避ける方向に試行錯誤的に進化することが大切」とある。また、「大きく強い規範の再建を一挙に目指すのではなく、小さく弱い規範を、・・・・・(中略)・・・・一つずつ再建する」ことの必要性が指摘されている。14 人文社会科学者の役割も、そのような「試行錯誤」と「小さく弱い規範」を地道に作り上げる試みの一つとなることを期待したい。

¹⁴ 小野塚『経済史』pp. 536-7.